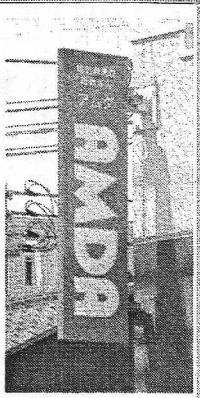
# ともに生きる 国際人道支援2
# 困った時はお互い様
## AMDA 緊急医療支援で世界へ

昨年1月のハイチ地震や、今年3月日本で発生した東日本大震災など、世界各地で起こる災害、紛争などで、医療を中心に救援活動を行っているのがAMDAである。8月9日(火)に、岡山市にあるAMDA本部を訪ね、広報担当の谷佳世さんとAMDA高校生会を担当する竹谷和子さんに、その活動のようすなどを伺った。



### ■AMDAについて

**▼設立まで**

AMDAの代表者である菅波茂さんは、医学生時代は「西日本アジア連絡協議会」の1人であった。1979年カンボジア難民救援のため、日本の医学生グループと現地へ派遣されたが、現地ではあまり活動することができなかった。それは、活動を受け入れてくれる受け皿がなかったからである。

何の情報もなく、とりあえず現地へ入っても、活動ができなければ意味がない。菅波さんは、医療支援する上で他人を思いやる「善意」はもちろんだが、情報や受け皿も必須であると考え、総合的な拠点を作ることを考えた。

こうして、1980年、アジア医学生国際会議を開催、さらに84年には東日本と西日本を統一するアジア医学生連絡協議会も開催した。そして、同年、アジアを中心とした救援活動団体として「AMDA」を設立した。

**▼その活動**

AMDAの活動は、緊急救援活動と復興支援活動に分けられる。緊急支援活動とは、災害や紛争の発生後すぐに現地に行き、保健医療活動をすることである。今年の東日本大震災の時も発生したその日から動き始め、翌日には第一陣が仙台入りしている。そして、現地の医療活動が再開、整備されれば、活動を引き継いで緊急救援活動は終了する。

しかし、緊急支援だけで終わりではない。その後も状況に応じて、現地の人達が一日も早く普通の生活に戻れるように、息の長い支援が続けられる。それが復興支援活動である。たとえば、現地の医療機関に物的支援をしたり、子供たちの心のケアとして、思いっきり遊べる環境を作ったりしている。ハイチ地震のときには、義肢支援も行った。

今回の東日本大震災での活動は、53カ国、132番目の活動となる。

## 善意だけでは救えない

AMDAについて説明する広報担当の谷さん。前はwebやコンピュータ関連の会社に勤めていたので、それを生かして速報を作ったり、寄付してくれた方に活動内容を伝えたりしている。活動資金を集めることも重要な仕事だそうだ

**▼支える人たち**

AMDAの活動は、ごく少数が本部で専任として事務的仕事をしているが、大半はボランティアによって支えられている。医師や看護師などの医療関係者は、普段は各自の病院等で仕事をしている人たちで、AMDAに登録し、いざというときにAMDAの要請を受け、あるいは自ら「行きたい」と声を上げて現地へ赴くのである。

また、AMDAの活動で重要な役割を果たしているのが調整員というスタッフである。もちろん、普段はそれぞれの仕事があって、いざというときに協力するわけであるが、医療スタッフのアシスタントとして事務的な処理を担い、医療物資を調達したり、医療スタッフが現地の病院に受け入れられるように交渉したりするのも彼らである。

## リアルタイムな決断が必要

実は、医療活動に限らず、支援活動を行う際に、受け入れ先が決まっているわけではない。そこでまず調整員が現地に行って、手探りで活動できるところを探すことの方が多いという。そして、現地のニーズに応えるべくいろいろ調整し、必要な対処をしている。

その際、なるべく現地のことに詳しい人がベストであるのは言うまでもない。現地での活動は流動的なので、リアルタイムでの決断が要請される。そのためには現地の人たちとのスムースなコミュニケーションが必要なのだが、実はアジアやスペイン語圏での活動が多く、英語圏でのそれは少ない。それで、なるべく現地のスタッフを採用したり、協力を得たりしている。また文化的な違いもあるので、イスラム圏へは、イスラム系の国から派遣するなど、最適の支援の形を追求している。

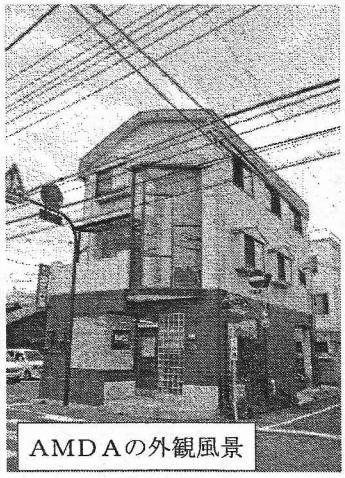
こんなこともあったという。1994年のルワンダ大虐殺の折、支援に入ったAMDAのメンバーが、日本語がしゃべれる現地の人と出会った。ルワンダに日本語をしゃべる人がいるとびっくりしたが、日本に留学していたルイーズさんという人がたまたま帰国していたのだった。そこでさっそく通訳をお願いし、ずいぶん助かったということである。言葉が通じないときは、現地語をいったん英語に直してまたそれを日本語にするという面倒なことをしていたが、ルワンダではその必要がなかったのである。

現在さまざまな形でAMDAに登録している人は500人いるということだ。

資金面でもボランティアの活動が大きい。寄付や募金活動はもとより、企業や団体、自治体からの支援もある。

### ■AMDA

災害や紛争発生時に、医療・保健衛生分野での緊急人道支援活動などを行っている特定非営利活動法人(NPO)。その名は、The Association of Medical Doctors of Asia(アジア医師連絡協議会=設立当初の名)の頭文字をとったもの。世界30ヵ国に支部があり、そのネットワークを活かして、海外の情報を入手し、いざというときにはすばやく多国籍医師団を結成して救援活動を開始する。本部は岡山市北区にある。



AMDAの外観風景

# 救える命があればどこへでも

## 援助は相互信頼の上に

真剣に話を聞く取材班

▼人間はお互い様

AMDAの活動理念は「困ったときはお互い様」という「相互扶助の精神」である。支援される側は、しばしば「支援慣れ」していて、支援してもらうのが当たり前と思ってしまうことがある。支援する側も、そういう関係が常態化すると、自分たちは支援してやっているという思いを持ちやすい。しかし、そのように援助する側、援助される側と一方的に分かれているわけではない。

たとえば、家族や友達なら、相手が困っているのを見たら「なんとかしてやろう」と自然に思えるはず。そのように、この社会も(世界も)何かあったら助け合える社会がよい社会であるはずだ。「友だちに対する思いと同じ」と谷さんは強調した。

そんな精神に基づいて、「救える命があればどこへでも」というのがAMDAである。国と国との関係を超えて、助けを求めている人がいれば出かけ、助けられるならば助ける。そのために、出来る限りのことをしようというのである。

その時、大切にしているのは互いの「尊敬と信頼」である。そのために、現地の人がただ助けられるというのではなく、たとえば運転手を頼むといった形で手伝ってもらう。そうすることで、その人が「自分が必要とされている」ことを感じることができるからだ。

谷さんが言うように「人は自分自身に価値があることが大事」なのである。お互いが必要とされ、価値があると認め合うことが「尊敬と信頼」の意味なのである。

## ■東日本大震災への対応

▼緊急支援

東日本大震災の際にも、AMDAは迅速な対応を取った。

3月11日、東北で大地震というニュースがテレビで流れると、事務所にいたAMDAのメンバーはその被害の大きさから救援の必要性を確信し、スタッフ派遣の臨戦態勢に入った。

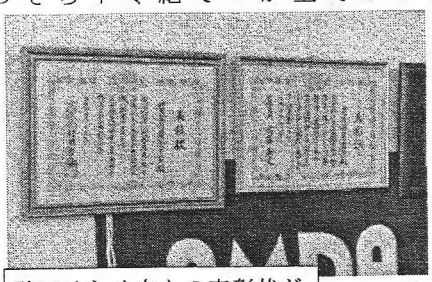
その時、代表の菅波さんはインドにいたため、手のあいている者で仙台のスタッフと連絡し、代表の「go」の指示が出ればいつでもスタッフを派遣できるように準備した。菅波さんとは国際電話で現地に赴くかの指示を仰いだだけで、後はスタッフ内で活動の規模などを決めた。

谷さんら本部事務所のスタッフ2名は、対応のために2、3時間寝てはまた出てくるといった感じで本部に詰め、情報の収集とスタッフなどとの連絡に当たった。数日経って学生の手伝いも来てくれたという。

また地震発生とともに、各地の医療スタッフから、AMDAが医療チームを派遣するならボランティアとして協力すると声を上げてくれた。しかし、問題はどうやって現地へ行くかであった。交通途絶の中で、一番早く現地へ行けるルートを探さねばならなかったが、「その時役に立ったのがツイッターだった」と谷さん。

そのツイッターで情報を集め、利用できる空港で一番近いのが新潟とわかると、まず新潟に集結し、そこから車を手配して仙台へ入ることにした。また山形のホテルを仮り押さえし、そこを中継地にして新潟で物資を調達して仙台へ送ることにしたという。非常時においては、迅速に決断し手を打ってゆくことが求められているのだ。

こうして12日には第一次派遣者が出発し、その日の内に仙台に入った。また医薬品、水、食糧などを新潟で調達して仙台にAMDAの調整員がいて、仙台での拠点などいろいろと準備したという。


壁にはたくさんの表彰状が

その後も、各地の医療関係者やスタッフが続々と現地に派遣され、14日朝からチームに分かれて各地の避難所をまわる、巡回診療も開始した。派遣者の増加につれて、活動も広がり、仙台市の他、岩手県の釜石市、大槌町、さらに南三陸町などで診療が行われた。

しかし、深刻なガソリン不足で、車が使えない。そこで、総社市の協力で、岩手県に三菱の電気自動車を船で運んでもらい、巡回診療に活用した。また医師たちはヘリコプターで現地入りした。これらは、企業や自治体などの協力があってできたものである。

また、現地のニーズに合わせたさまざまな物資援助も行ったが、それら物資の提供や運搬においても、おかやまコープやタクシー会社など多くの協力があった。

地震発生後から4月30日までの間にAMDAが派遣したスタッフや医療チームは149名に上る。東日本大震災では外傷は少なかったので、内科や精神科の医師を中心にチームを作った。海外からの参加者もいたという。

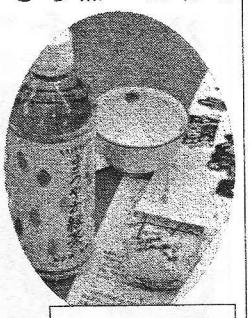
▼復興支援へ

現地の医療機関が診療を再開し始めたので、4月20日までに現地の医療機関に引き継ぎ、緊急の診療活動を終えたが、高齢者が多い実情に合わせ、鍼灸師を中心としたサポートは継続することにした。

というのも、被災地は高齢者の方が多く、地震で水道が止まったために水汲みをしなければならないといった事情から、腰痛などを訴える人がたくさんいたからだ。

こうして、5月1日から、支援活動を緊急支援から復興支援へと切り替えた。これは、現地の必要に応じて、医療機器や設備などを寄贈したり、医療体制が十分でないところは交代要員がいないので、それをサポートするべく、医師のほかに看護師や薬剤師なども含めた医療スタッフを派遣したりといった活動である。

「現地の医師や看護師が地震以来働きづめでなので、休みを取ってもらうために代わりの人を派遣したりしている」と谷さんは語る。


お茶と饅頭もいただきました

子供を診療するAMDAのスタッフ。南三陸町で＝AMDAのHPより

# スポーツが心をつなぐ

中学生のサッカー交流の様子＝AMDAのHPより

▼スポーツ交流

精神的な支援も必要で、その一つとして、青少年のスポーツ交流がある。

8月2日から8月6日にかけて、岩手県の大槌中学校など現地の中学校3校の生徒ら52名を岡山に招き、岡山の3校の中学生とのスポーツ交流会を開催した。

1日目は、RNN（人道援助宗教NGOネットワーク）主催で祈りの会、慰霊祭を執り行った。

2日目は、総社市で学校対抗の試合を、3日目は岡山市で学校を解体した混合チームで交流戦を行った。参加した生徒は、「純粋に楽しめた」と語っていたという。住所やメールアドレスを交換する姿も見られたとか。ホームステイもあって、同世代の交流が出来た。

4日目は、参加した中学の先生からの要望で、広島の原爆ドームなどを見学した。何もないところから復興した広島の姿から学びたいということである。

5日目は、神戸で阪神淡路大震災からの復興した街を見学し、「人と防災未来センター」を訪れた。その後、伊丹空港から帰路についた。

この交流の効果は思いのほか大きかったらしく、谷さんは「大人が励ますよりも、同年代の子たちが励ました方が、より身近に感じられていいんだと思う」と語る。

このような心の復興支援もAMDAの活動の一つだ。

また、大槌高校など被災地の高校生や専門学校生など、政府の手の届きにくい所の学生たち100名ほどに奨学金を支給している。

▼活動の広がり

この7月、AMDAの活動に共感した岩手県大槌町の人たちが結集して、AMDA大槌クラブを設立した。それに合わせて、大槌町の高校生たちも「AMDA高校生会in大槌」を発足させた。大槌高校は避難所となっていたが、AMDAはそこを拠点に診療活動をしていた。その姿が大槌の人々の気持ちを捉えたのである。

このように、AMDAの活動によって、地域の人たちとの「互いに助け合う」という大きな絆が生まれたのである。その精神は、また誰かが困っているときに「お互い様」と手をさしのべることになるだろう。その輪が広がれば、社会はもっと平和で暮らしやすいものになるに違いない。

# 現地のニーズに合わせて

## ■ハイチ支援

▼ハイチ地震への支援

2010年1月12日に起こったハイチ大地震は、規模こそマグニチュード7と、東日本大震災に比べると小さいが、死者31万6千人、被災者は200万人を超える巨大災害となった。

これほどの災害をもたらした原因は、直下型地震であったのとハイチの貧困と政情不安定による社会基盤の脆さにあった。

この大災害に対して、各国はさまざまな形で支援をしたが、AMDAも地震発生直後にカナダなど多国籍医師団を派遣し、被災から4日後の1月16日から緊急医療支援活動を行った。ハイチでは外傷が多かったため、それに応じた医師が派遣された。

ハイチのような政情不安定の国での活動は、場所によっては命に関わるし、暴動などもいつ起こるかわからないといった問題がある。その上感染症の流行も考えられる。そのために、調整員が十分な安全を確認した上で現地に赴く。「何か事故があれば、活動できなくなる」と谷さん。

安全確保のために、信用できる人にコーディネーターを頼むことにしている。ハイチでは岡山大学歯学部を卒業したハイチ人医師がコーディネーターになってくれたのでずいぶん助かったという。

現地での行動にも細心の注意が払われる。たとえば暴動があれば、なかなか外に出られない。10m離れたところへでも車で移動するのだとか。また危険地域だとか暴動が起こるといった情報は、現地の人がよく知っていて、現地の人たちの協力を得ながら活動している。

カリブ海の島国ハイチ。人口約990万人。面積約28.000平方Km。首都はポルトープランス。旧フランス領。アフリカ系民族

▼コレラの流行

とはいえ、ハイチの被災者の数は桁外れで、その上貧困と政情不安が復興を妨げている。多くの人が仮設テントなどでの暮らしを余儀なくされ、水道や下水はもちろん、排便の処理などの設備も整備されていない状況で、衛生面でも劣悪な環境の中で暮らすしかなかった。そのため、昨年の10月頃にはコレラが大流行し、数千人が死亡して大きな問題となった。

この時にもAMDAは緊急支援を行っている。この時、コレラ流行に怒った人々の暴動も起こって、派遣を見合わせるという事態もあった。

しかし、何とかハイチ入りし、コレラの治療に必要な点滴チューブや抗生物質、使い捨て手袋等の医薬品をドミニカで調達して送った。そして、点滴室など設備を確保してコレラの治療に当たると同時に、排便の処理など衛生面での指導も実施して感染防止に努めた。コレラの感染源は排便や嘔吐物で、これらを適切に処理すれば感染は確実に減らせるからである。

このように、現地の実情に合わせて、派遣する医師や支援活動も柔軟に対応する必要がある。谷さんも「同じハイチの活動でも起こった直後とその後で全く活動が違う」と語る。

# ハイチでは義肢支援も

たとえば「義肢支援プロジェクト」もハイチの実情に合わせた支援の形だった。ハイチでの問題は、もろい建物の崩壊で負傷し、足を切断しなければならない被災者が多かったことだ。そこで、AMDAは義肢支援プロジェクトを立ち上げ、義肢製作工房を作り、リハビリも出来るようにした。

取材の様子

# 高校生会にできることは

## 支援活動を通して学ぶ

### ▼スポーツ親善交流

地震発生から約半年がたった2010年8月17日、ドミニカの首都サント・ドミンゴに日本とハイチ地震被災者の青少年がやってきた。3カ国のサッカー親善交流をするためである。

この交流は「スポーツ交流を通してハイチ被災者の精神的なケアの一助となり、復興の機運を高め側面的に支援すること」、日本の参加者は、「ハイチとドミニカの青少年との交流、ドミニカ国内の国際協力活動現場の訪問、帰路の国連本部の訪問などを通して国際的な視野を養うこと」などを主な目的とするものである。

実はハイチとドミニカは隣国同士でありながら仲が悪く、そのため中立的な立場の日本が中に入ることで、円滑な交流が出来るようにしたのである。谷さんは「ドミニカの人にもハイチのことを知ってほしい」という願いがあったと語る。

参加したのは日本からは大阪FC千里中央などの中高生18名と、ハイチ16名、ドミニカ20名の青少年たちである。

試合は8月18日、19日の2日間にわたって行われて、どのチームも試合を楽しんだ。疲労と困惑の表情を浮かべていた選手もいたが、試合が始まると顔つきが変わり、体格の差があるなか最後まで諦めずに戦った。中には負けたのが悔しくて涙を流した選手もいたという。

なお、このスポーツ交流で使用されたサッカーボールはAMDAで用意し、使用後はハイチの青少年にプレゼントした。

スポーツ親善交流に参加した日本、ハイチ、ドミニカの青少年たち

## ■AMDA高校生会

### ▼その活動

AMDAには高校生会がある。1995年の秋に発足した高校生のボランティアグループである。現在のメンバーは、高校1年生から3年生まで合わせて20人。AMDAの活動に興味を持つ高校生の自主的参加で構成される。

会員が高校生会に入った動機は、「メディアやネットを通じて」や「先輩が入っているから」と、先輩・後輩の関係で入る人も多い。学校はばらばらだが、心を一つにして活動している。

活動は、月に1回、土曜日か日曜日にAMDA本部に集まって報告会や勉強会を行っている。その中で、高校生として自分たちに今、何が出来るかを話し合い、それを行動に移す。具体的には、AMDAが行っているプロジェクトの中から、自分たちで支援できるプロジェクトを1つ選び、街頭募金に立ったり、地域行事への参加や、テレビやラジオ出演を通し支援を呼びかけたりしている。

昨年は、パキスタン洪水の街頭募金、ハイチ復興支援スポーツ交流に向けての準備、岡山大学鹿田祭参加（パネル展示・顔アート作成展示）などの活動を行ったとのこと。ハイチへはサッカーボールやメッセージを現地の子供たちに届けた。

### ▼東日本大震災に際して

今年の3月からは東日本大震災支援の活動を開始し、街頭募金、岩手県大槌高校へ向けて手書きのメッセージボードなどを作成した。AMDA高校生会in大槌のメンバーも、「自分たちに出来る支援を」と、AMDA大槌クラブと、炊き出しの補助を行うなどの活動をした。

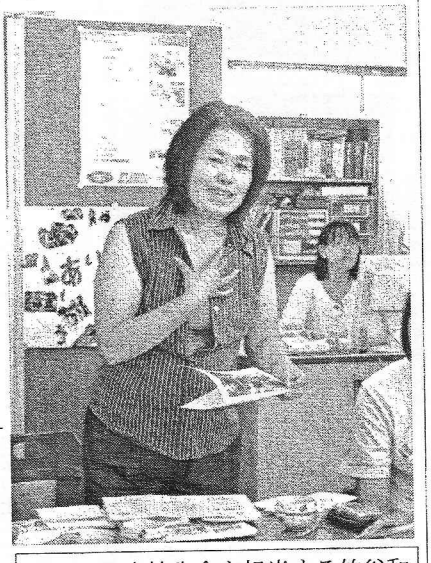
そのAMDA高校生会in大槌のメンバー2人が、7月22日から2泊3日で岡山にやってきた。岡山の高校生会メンバー宅でホームステイして、岡山の郷土料理である「まつり寿司」を作ったり、「野土路ほたる祭り」に参加したりして互いの交流を深めた。

竹谷さんは「（彼らと）一緒になって世界に対して何かしたい、つながっていきたい」と、今後も交流を続け、活動に生かしていきたいと願っている。

### ▼バングラデシュ スタディーツアー

AMDAは、発展途上国の一つであるバングラデシュへの訪問を通して、現地の人々への人道支援や交流を行うスタディーツアーを実施している。この交流を通して、国際協力についての理解を深めたり、現地の人々が日本を好きになってもらうほか、日本人自身が日本を見直し反省する機会でもあってほしいという狙いもある。

この「バングラデシュ事業見学プログラム」は、年1回、春休みを利用して、1週間程度の日程で実施される。今年の3月にも高校生2名が参加したということで、その1人は兵庫県の高校生だったそうだ。



AMDA高校生会を担当する竹谷和子さん。元中学校の先生で、「バングラデシュ大好き」という方。この春にもスタディーツアーで参加者を引率してバングラデシュを訪れた。

### ▼関わった主なプロジェクト

AMDA高校生会が関わった主なプロジェクトは次の通りである。

中国雲南省小学校再建、ネパール障害児学校建設、カンボジアチャンバック小学校再建、ミャンマー子ども病院栄養コーナー支援、スリランカ医療和平プロジェクト、ホンジュラス青少年育成・エイズ予防教育支援プロジェクトなど。

高校生会担当の竹谷さんは「世界の中で自分たちはどういう立場なのか、世界に目を向けてほしい」と語るが、AMDA高校生会のメンバーが、その時々の、世界の災害地や貧困地へ目を向け、高校生の自分たちに出来ることをしてきたことがわかる。今回の取材では、AMDA高校生会のメンバーに直接話を聞くことは出来なかったが、同じ高校生として見習いたいと感じた。

＊＊＊＊＊＊＊

AMDAを取材して、城西生は真面目で、それなりには勉強しているがそれだけでよいのかという気がした。東日本大震災に対しても、どこか反応が鈍い。3月に募金活動をしたものの、その後は個人的にボランティアとして東北へ行った人もあるようだが、学校としての取り組みは無いままである。兵庫県でも、防災科がある舞子高校をはじめ、近くでは高砂高校や松陽高校の生徒がバスでボランティアに行ったといった記事が新聞に載っていた。

そのように、未曾有の事態に自分に出来ることを問うて、それを行動に移している高校生がいる。AMDA高校生会のメンバーもそうだ。その姿勢に学んで、もっと社会に目を向けるべきではないかと思わされた取材であった。

※AMDA高校生会では、岡山県内に限らず広くメンバーを募集している。関心のある人は、入会してみてはどうだろうか。申込用紙は新聞部顧問の橘先生のところへ行けばもらえる。

（2年 池田健人 1年 三俣風華 藤田実希 卜田空泉）

大槌高校生から届いた感謝のメッセージ